

VOICE OF DESIGN

日本デザイン機構

Japan Institute of Design
東京都港区虎ノ門1-2-18虎ノ門興業ビル7F

Toranomon Kogyo Bldg.7F 1-2-18 Toranomon, Minato-ku, Tokyo 105-0001 Japan
〒105-0001 Phone: (03)5521-1692 Fax: (03)5521-1693 1999年4月25日発行

VOL.5-1

特集

Design for the World



Design for the World 誕生と目標

マイ・フェリップ

Design for the World事務局長

動き始めたDesign for the World

デザインの国際専門団体を横切りにする新たな国際組織Design for the World（略称DW）の設立と栄久庵憲司氏の会長就任に関して本誌のVol.4-3（1998年10月25日発行）でお知らせしました。このDWの事務局長のマイ・フェリップ女史が本部バルセロナより来日し、3月16日に国際文化会館で日本のデザイン関連諸団体へのアピールの会が催されました。会は栄久庵会長のDWのシンボルマーク（手毬）の意味の紹介に始まって、マイ・フェリップ事務局長からはこの世界機構に対する熱いメッセージが述べられました。尚DWの理事が7月に東京へ集まる機会をとらえ、日本デザイン機構主催のシンポジウムDesign for the World '99東京の開催を予定しています（本号6ページ）。

私は今回、非常に特別で、かつエキサイティングな役割で来日しました。私はここにおいで为荣久庵憲司日本デザイン機構会長と同じようにICSID（国際インダストリアルデザイン団体協議会）の会長を務めましたが、今回のDesign for the Worldの誕生について私たちは「ようやく栄久庵憲司の子供が生まれた」とっております。

彼は非常に長い長い時間をかけて強固な意志をもって、大きな観点からDesign for the Worldをまとめようと頑張ってきました。彼のアイデアは、今日の課題に対して一つの領域、例えばインダストリアルデザインだけから見のではなく繋げたものにしようとしたのです。彼のアイデアは、一つ一つの専門領域がそれぞれにやるのではなく、皆で手をとりあってやろうということであり、皆もまた喜

目次

特集 Design for the World

・ Design for the World 誕生と目標	
マイ・フェリップ	1.2
・ Design for the World	3
・ Design for the Worldプロジェクト	4.5
・ シンポジウム：Design for the World '99東京	6
報告：フライブルク市視察ツアー	7
シンポジウム：循環型社会のデザイン	8~11
エコデザインセミナー	12.13
JDサロン：ホームレスとそのデザイン	13.14
寄稿：障害者のためのデザイン	15
ニュース：(財) 共用品推進機構の発足	15
事務局より	16

CONTENTS

Leading Article	1~3
DW Project	3~6
Report	7~12
JD Salon	13.14
Interactive	15
From the Secretariat	16

Design for the World

Ms. Mai Felip, Secretary General of Design for the World, a new international interdisciplinary design organization based in Barcelona, Spain visited Japan. On March 16, a meeting was held in Tokyo, mobilizing design related organizations in Japan to introduce the newly born organization. She expressed her enthusiasm to make the organization active. In July, a symposium on "Design for the World '99" is going to be held in Tokyo. Kenji Ekuan is the first Chairperson of Design for the World.

Birth of Design for the World, and its Goals

Mai Felip, Secretary General of Design for the World

I served as chairperson of the ICSID as Mr. Ekuan did. When Design for the World (DW) was established, we said "Mr. Ekuan's baby is finally born," because he had been so eager and made tireless efforts to create an interdisciplinary organization. In DW, we have a goal to "make the hitherto invisible visible." DW provides a place and opportunity for designers of different genres to meet together and make coordinated efforts. So far, ICOGRADA, ICSID and IFI have joined DW.

Special Issue

Design for the World

「Design for the World 誕生と目標」マイ・フェリッブ

んでそれを迎えたのです。

例えばDesign for the Worldでは「今までビジブルでなかったものをビジブルにしよう」という声があがりました。それぞれの領域の人が集まって従来のようにディスカスしてまとめようとするのが非常に難しい課題が多いのですが、それを連続してまとめるのがDesign for the Worldなのです。

幸いそうした私たちの意志と、時代の気運が一つになったといえます。最初に相互に話し合いを始めたのはICOGRADA (国際グラフィックデザイン協議会)、ICSID、IFI (国際インテリアデザイナー連盟) の3団体で、4年以上経過しました。その力が非常に上がったのは、2年前に行われたトロントの総会の時です。その時を機会にスペイン政府が金銭的にもバックアップしてくれたので勢いづいたのです。

何故スペインか

ここで私は、皆さんから出るであろう質問「何故スペインか、何故バルセロナか」について前もって答えておきたいと思います。1992年、スペインでオリンピックが開催されましたが、そのオリンピックのテーマが「文化」だったのです。その時に実はデザイナーが全世界のそれぞれのテーマを持ち寄ったのです。そこへ集まったバルセロナ市民も、また他国から来た人々も、皆が一緒になって楽しめるものにしようと企画されたのです。都市計画家、建築家、グラフィックデザイナー、インダストリアルデザイナーなど集まった皆が一つになって計画を立

て、非常によい結果を生み出しました。

オリンピックは1992年で終わったかに見えましたが、それらを見に来たスペイン政府は、そうした気運を何とかして生かして維持したいと考えたのです。ちょうど、その時にバルセロナで理事会が開かれ市長が訪れ、栄久庵憲司氏の素晴らしい構想の内容を「デザイン」としてまとめて行くということについて、高い評価をしたのです。市長はその構想をサポートしようと申し出て、それ以来今日まで続いているのです。以上が「何故スペインか」への答えです。

Design for the Worldの3つの柱

その後の2年間で私たちは憲章を作り、内規を作り、理事会を開催し、事務局を設けたりしてきました。それと共に様々な提案される「アクション・プラン」について評価と検証をして来ました。会員を増やすことは、もちろん重要な目的の一つです。先の3団体に加えて今は建築家、都市計画家、クラフトマンの組織に働きかけているところです。

メンバーシップには3つのカテゴリーがあります。一つは「フルメンバー」で投票権があります。もう一つには「アソシエイト・メンバー」で各リージョナルの代表です。アソシエイト・メンバーはそれぞれに各地域の問題に近い、密着しているという特長があります。3つめの重要なメンバーは「パトロン」とよばれるメンバーです。パトロンは財政的にはもちろんですが様々な面での知識や経験も豊富です。企業、NGO、それから世界

的なデザイン団体等も含まれます。パトロンになるメンバーは基本的な条件としてDesign for the Worldをよく理解してやる必要があります。

7月のシンポジウムと基本的な考え方

Design for the Worldでは7月に日本で正式なプレゼンテーションを行います。ボード・メンバーが来日しシンポジウムで皆様とお会いできます。7月の活動は私共にとってテスト的な意味があります。何故かといいますと、9月にシドニーで大会が開かれるからです。私から申し上げられることは『私たちはヒューマニティのために、ということが出来るか』を考えて行動する組織だということなのです。私たちは「質素」から出発してネットワークを組織しようとしています。理事会の出席者も皆ボランティアです。同時に私たちは近代的なメディアや、近代的なテクノロジーを有効に活用したいと考えています。そして、主な活動を支える財政的基盤も安定するよう目論んでいます。個々のプロジェクトに個々のスポンサーを求めるとか、あるいは複数のス



This will be followed by the convention in Sydney in September. We will try to find sponsors for each project or collaborate with other NGOs. We prepared a matrix to evaluate a project from different angles. This will help with the feedback on the results of projects. I hope that DW's activities will help improve human and social life in the coming millennium.

* Why in Spain?

In 1992 when the Olympic Games were held in Barcelona, the theme was "culture." Urban planners, architects, graphic designers and industrial designers from the world joined to make the Olympic Games a success. Citizens of Barcelona also took part in this grand project. After the big event, the Spanish government wanted to maintain this positive atmosphere. When the DW Board met in Barcelona, the mayor visited the Board members and expressed his full support for Mr. Ekuian's idea about uniting designers of different disciplines. His support has continued until today.

* Three Pillars of Design for the World

There are three categories of membership. One is "full members" with a right to vote. Second is "associate members" which are regional representatives well versed in issues of the regions they represent. The third one is "patron" organizations which render financial and other support with their expertise and experiences. Companies, NGOs and world-famous design organizations are included in this category. Patron organizations should understand what Design for the World is.

* Symposium in July

The symposium planned to be held in Japan in July will be the official debut of DW in Japan.

ポンサーを求める時もあります。NGOとコーポレーションが共につくこともあり得るからです。

それぞれのプロジェクト・プロポーザルには評価のマトリックスが用意されており、色々な方向から評価する仕組みになっています。判定基準の表は結果をフィードバックするのに役立ちます。

以上が全体的活動と組織の説明です。私たちの活動は人道的・社会的なもので

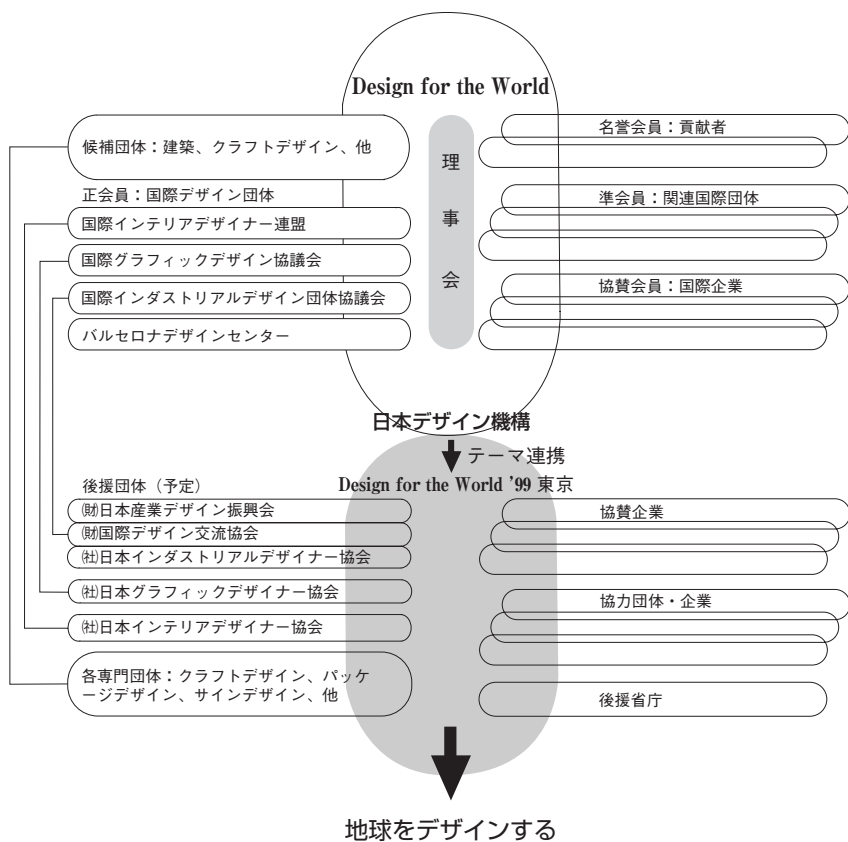
あると同時に何よりも将来の千年紀（ミレニアム）に貢献するものになればと願っています。

（本文は7月5日、6日に日本で開催されるDesign for the World '99東京に向けて来日されたマイ・フェリッップ事務局長が3月16日、国際文化会館で関係者にアピールした講演をまとめたものです。）

Design for the World (略称DW) 概要

この世界機構は、細分化した専門の壁を乗り越え、本来デザインの持つ総合力をもって、地球課題へ創造的に挑戦することを目的に1998年7月23日に本部をスペインのバルセロナに置いて創設されました。この機構は、デザインに関わる国際団体からなる正会員、南米、アジア、欧州などでまとまっているデザインにかかわる地域国際団体を対象にした準会員、財政支援をするスポンサーとしての賛助会員、そしてDWの目的に貢献した個人としての特別会員によって構成されます。現在発起会員としての正会員は国際インダストリアルデザイン団体協議会、国際グラフィックデザイン協議会、国際インテリアデザイナー連盟に事務局を支援するバルセロナデザインセンターの4団体です。さらに都市計画や建築、クラフトデザインなどの国際組織に呼びかけ、20~30団体を構成員にする組織を目指しています。

今日の地球課題をデザインプロジェクト化しそのアクションプランが検討されています。規模や組織構造は異なりますが、その趣旨や扱うテーマは日本デザイン機構（JD）とほとんど同じと言えます。JDは日本、さらには東アジアにおけるリエゾンの役割を担うことができます。また日本発のプロジェクト提案を行い、国際的なネットワークの中でのプロジェクト展開を期待することができます。その先駆けとしてJD主催の国際シンポジウムDesign for the World '99東京を企画しています。（伊坂正人）



* Design for the World (DW) outline

Design for the World (DW) was established on July 23, 1998 in Barcelona in Spain. The purposes are to overcome the barriers between segmented design genres, and with the synthetic power of design, address global issues with creative approaches. DW consists of "full members" comprising international design organizations, "associate members" comprising regional design organizations, "patron" including sponsoring organizations/companies, and "special members" of individuals who have contributed to the development of design. The founding and full members are ICSID (International Council of Societies of Industrial

Design), ICOGRADA (International Council of Graphic Design Associations), IFI (International Federation of Interior Architects/Designers), and Barcelona Design Center. It aims to increase its full members to 20 to 30 organizations including urban planners, architects and craft designers associations. The Barcelona Design Center is supporting DW with its secretariat work. Before the official inauguration, the 20th Congress of ICSID held in Toronto in 1997 served as a prelude for establishing DW at which time representatives of member organizations discussed common issues. Currently an action plan is being studied

whereby contemporary global issues will be addressed through design projects. Although different in scale and organizational structure, DW is similar to the Japan Institute of Design (JD) in its goal and issues to be addressed. JD can function as a coordinator of all design organizations in Japan, and serve as a liaison organization for East Asia. We will also be able to propose a project that can be implemented through an international network of design organizations. The proposed international symposium "Design for the World '99-Tokyo" that JD organizes in July this year with DW will spearhead such developments. (Masato Isaka)

Special Issue

Design for the World

DWプロジェクト

Design for the Worldでは、今日のグローバルイシューに対応する課題をとりあげ、プロジェクト化し、そのアクションプランを検討しています。それらは日本デザイン機構のテーマと重なりあいます。また日本デザイン機構のテーマをDesign for the Worldへ提案することも考えられます。以下に検討されているプランの一部を紹介します。

防塵マスクのデザイン

趣旨：1997年の東南アジアのスモッグ公害は記憶に新しい。人々はそれがどんなものか身をもって体験した。

一昨年の煙害が再びおこるおそれがある。ボルネオ、スマトラなどインドネシアの広大な森林が焼かれている。インドネシア、マレーシア、シンガポール、ブルネイ、フィリピン南部がもやに覆われ、何百万という人々が呼吸器を冒されようとしている。

空気中の粒子の表面に付着した物質が一度肺にはいると蓄積され、咳をしても排出されなくなる。この現象が自動車の排気と結びついてさらに悪い状況になることが恐れられている。1997年の煙害ではスマトラ市では多くの人々が入院し、診療所は手当を受ける人々であふれかえった。

煙害の犠牲者となったのは主に高齢者と幼児であった。煙は家の隅々まで入り込み、マレーシアでは15,000人以上の子供が煙害関連の手当を受けた。

現在、煙害用として一般的に用いられているのは手術用マスクである。1997年の煙害の際はインドネシアとマレーシアの

地域に手術用マスクが無料で配布された。しかし煙害がもたらす10ミクロン以下の有害粒子を防げないこれらのマスクは気休めに過ぎず、より高機能な防塵マスクが求められている。

プロジェクト仮説：

- 製品開発：プロダクトデザイン（プラスチック本体＋ライナー）／パッケージデザイン（絵文字などによる表示）／製造プロセス。
- 配布計画：被災地への供給方法／NGO、国連諸機関との連携方法など。

途上国における識字率向上のためのデザイン

趣旨：国連は人間開発すなわち人が人として生きていくための基本的な社会環境の整備を政策の柱の一つにあげている。その成果は進んでいるものの、まだ途上国を中心に地球人口の約9億の成人が文盲のままである。低い識字率は、家族計画、健康維持、女性と子供の権利といった基本的な人権上の問題解決に対する大きな障害となっている。また途上国の社会経済開発にとっても技術教育の進行を妨げている。さらにその国の民主化に際しての選挙の実施などにも影響を与えている。

途上国のとりわけ村落部における女性と子供の識字率向上を促進するためには、デザインの各専門の果たす役割は大きい。グラフィックデザインによる各地域文化をふまえた絵文字開発、識字を技術開発にむすびつけるインダストリアルデザイン、仮設の教育空間を提供する建

築デザインなど。こうした各デザインを総合的に連携させることによって、より専門性の高い識字率向上のためのプログラムを当該地域に提供することができる。

プロジェクト仮説：

- 基本教育：識字のための絵文字開発・筆記具と組み合わせた教科書開発／仮設教室（テント、机、椅子、黒板など）／情報ネットワーク開発
- 特殊教育（家族計画、健康開発などを目標）：絵文字ポスター、パンフレット／避妊具、基本医薬品キット
- 技術教育：衣料品製作（絵文字教科書、ミシン、仮設作業場など）／自動車整備（絵文字教科書、自動車モデル、仮設整備場など）／その他 エコロジー環境教育
- その他：選挙システム（絵文字パンフレット、仮設投票場など）

難民、災害被災地の医療支援のためのデザイン

趣旨：地球規模で頻発する大規模な自然災害や民族紛争などにより地球上で約5,000万人が避難民、難民生活を余儀なくされている。その初動支援における医療活動が国際NGOによってなされているが、その装備は特にシェルター系を中心にしてまだ不十分である。適切な救急医療環境を整備することは、スムーズな初期医療行動を可能にする。こうした医療環境づくりにはデザインの専門を横断したアプローチが求められる。

医薬品や医療機器のデザイン、そのキットのパッケージ、仮設の医療空間そし

distributed to people in Indonesia and Malaysia. But these masks served only psychologically, because toxic particles are so small that masks are not able to prevent them from going through. A mask with higher dust-proof ability is required.

* Project Assumption

- Product Development: Product design and package design, and manufacturing process
- Distribution Plan: Methods of distribution to affected areas, and linkage with NGOs and UN agencies.

* 2. Literacy Education in Developing Countries

About 900 million adults remain illiterate in developing regions. The low literacy rate pre-

sents a great obstacle in solving basic human rights issues, and promoting the socio-economic development of developing countries. It affects the conduct of elections, an important factor for democratization.

Designers of different genres can play important roles to promote literacy education.

* Project Assumption

- Basic education: Pictogram for literacy, textbook combined with writing utensils; temporary classrooms; information network
- Special education (family planning, health development): Pictogram posters, leaflets; contraceptives, basic medicine kits
- Technical education: Dressmaking; automo-

Project Proposals to Design for the World

The themes that JD is currently studying can be proposed as projects implemented by Design for the World. Some of them are shown below:

* 1. Dust-Proof Mask

The 1997 forest fire in Indonesia and consequential smog pollution in Southeast Asia is still refresh in our memories. Millions of people damaged their respiratory organs. Those who suffered most seriously were elderly people and infants. Currently, the mask used by medical doctors during surgery is commonly used to prevent dust inhalation. In the smoke pollution in Indonesia in 1997, surgical masks were

DW Projects

て被災者への情報伝達など、総合的なデザイン解決が適切な医療オペレーションを支援する。

プロジェクト仮説

- 仮設病院開発：病院を中心に建設、通信などの機能を備えた6台のコンテナからなる移動可能な病院施設の開発。
- 自家発電付き仮設病室開発：太陽電池を装備したテント幕と軽量ポールによる仮設病室。ロックダウンによってコンパクトにまとめられ一人で長時間携帯可能とする。医療以外の教育のための教室などにも展開ができる。
- 被災地救援の医師のためのドクターケース開発：医師の初動救援活動に必要な医薬品、機材をおさめる軽量、コンパクトなケースの開発。

サスティナブル・ツーリズムのためのデザイン

趣旨：近代化は多くの歴史的文化財を消し去ってきた。現在そうした渦中にある文化財の保全とそれの観光活用による産業振興を目的に、UNESCOは数年前からツーリズム・サウス（南の観光）という文化観光プロジェクトを推進している。このプロジェクトには建築から工芸、そしてプロモーション等、多くのデザイン専門の共同を要する。

一方で自然の原風景を求める観光が盛んになってきている。例えばそうした自然の宝庫であるコスタリカには多くの観光客が訪れる反面、自然という観光資源そのものが損なわれてきている。自然の保全をしながら観光資源として活用する

方策が求められている。

文化財や自然などを保全しつつ、サスティナブルな観光開発をするというテーマは、多くの専門を横断し国際共同しなければならないというDWの趣旨にそったテーマとなる。

プロジェクト仮説

- エコロジカルな居住環境開発
- エコロジカルな移動システム・機器
- サスティナブル・ツーリズムのためのプロモーションデザイン

高齢者の国際移動のためのバリアフリー・デザイン

趣旨：東京の郊外に住む一人の老人（女性）が自宅からモスクワに住む子息のところへ安心して行くためには、高齢福祉、健康医療、都市環境、景観、交通、コミュニケーション等々の多面的な分野に対しての問題解決が求められる。その解決策は、老人の身体支持具、車椅子、住宅、道路、公共交通、サイン等々の具体的なデザインを通して図らなければならない。多くのデザインの専門の力が求められ、しかも東京という一地域だけでなく、他の地域と国際的な連携をもった解決が必要となる。

このテーマは、人間の基本的な権利である移動の自由の獲得という人類が共有する根元的なテーマであるとともに、極めて日常的な課題である。こうした人間の尊厳を日常のデザインの中で解決することがDWが標榜する新たなデザインの価値を広く普及させることにつながる。

1999年は国際高齢者年で、こうした問

題へのアプローチがまさにDWに求められる。様々なデザインを具体的に推進するためにはデザインの各専門はもとより、HABITAT、WHOなどはもとよりUNESCOやUNICEFそしてILOなど様々な国連諸機関とも連携しなければならないテーマである。

プロジェクト仮説：

下記領域のバリアフリーデザイン
・居住環境／身体支持具（椅子、ベッド、車椅子、歩行補助具など）／パーソナル移動機器／公共移動機器／道路、道路施設（ストリートファニチャーなど）／駅舎、駅設備／サイネージ／空港、空港施設／設備機器／航空機／医療機器／通信機器／案内パンフレット、チケット、カードなど／その他 移動システム、安全システム、医療システムなど



Design for the World

Design for the Worldのシンボルマーク手塚をイメージに地球を取り巻く様々な専門を帯で表し、その交差するところが共同のテーマ

bile maintenance and repair; environmental or ecological education
d. Others: Election system

* 3. Medical Support for Refugee Camps and Disaster-stricken Areas

About 50 million people are forced to live as refugees or displaced people. International NGOs are engaged in medical services as an early relief action, but their equipment and instruments are not sufficient. Designers should help improve early-stage medical services across design genres.

* Project Assumption

- Temporary Hospital: Mobile clinic equipped with medical instruments and telecommunica-

tions.

b. Temporary hospital rooms made of tent cloth and lightweight poles with a solar cell power generator. The same can be used as a classroom.

c. Doctor's Kit for initial relief activities containing medicines and instruments

* 4. Sustainable Tourism

Sustainable tourism industry while preserving the nature and cultural assets of developing countries.

* Project Assumption

- Ecological living environment
- Ecological transport systems
- Promotion of sustainable tourism

* 5. Barrier Free International Travel for the Elderly

Freedom of movement is a basic human right that should be guaranteed to every person including elderly and handicapped people.

* Project Assumption

a. Barrier-free design for living environments, supporting apparatuses, personal and public transport vehicles, airports, airport facilities, equipment and instruments, airplanes, medical appliances, communication devices, leaflets, tickets, credit/prepaid cards, etc., transport systems, security systems, medical systems, and so on.

Special Issue

Design for the World

予告：シンポジウム Design for the World '99 東京

企画案

主催：日本デザイン機構

特別協力：(財)国際協力推進機構、日本経済新聞社

後援(予定)：通商産業省、外務省、(財)国際交流基金、(財)日本産業デザイン振興会、(財)国際デザイン交流協会、(社)日本インダストリアルデザイナー協会、(社)日本グラフィックデザイナー協会、(社)日本インテリアデザイナー協会、(社)日本クラフトデザイン協会、(社)日本パッケージデザイン協会、(社)日本サインデザイン協会、他

会期：平成11年7月5日(月)6日(火)

会場：パレスホテル(東京・予定)

趣旨：Design for the Worldは、地球環境、資源エネルギー、高齢化、高度情報化など細分化した専門分野だけでは取り組むことの困難な今日の課題に対し、様々な専門を結びつけ創造的にチャレンジすることを目的に創設された新たな国際組織です。このDWの役員を招聘して、地球を視野にした分野を越えたデザインプロジェクトの策定、その意義、行動計画などについて検討するとともに、そうしたテーマや活動の意義についての普及啓蒙を図ります。

テーマ：Design for the World—地球をデザインする(仮)

環境、福祉、災害、都市、途上国、先端技術などがかかえる今日のグローバルな課題を国際的かつ専門を横断するデザインプロジェクトとして検討し、その具体化の方策、行動計画などについて討議します。

Symposium "Design for the World '99 - Tokyo"

Global issues of today including environment, welfare, disasters, urban problems, problems of developing countries and advanced technologies will be looked into from a design point of view. The solutions to these questions will be formulated as design projects, and measures to realize them will be discussed. JD organizes this two-day meeting as part of the Design for the World programs.

Time: July 5 to 6, 1999

Place: Palace Hotel, Tokyo

プログラム：

7月5日(月)【午後】

- ・開会挨拶：栄久庵憲司(DW会長)
- ・プレゼンテーション：マイ・フェリッポ(DW事務局長、BDC事務局長、スペイン)
- ・基調講演：アンドレ・リカルド(DW理事長、スペイン)

7月6日(火)【午前】

- ・テーマセッションA：**地球課題へ挑戦するデザイン**(仮題) 討議項目/循環型社会のデザイン/途上国の教育のデザイン/災害救助のデザイン/難民、避難民のためのデザイン等。

パネリスト：マリアヌス・フランドセン(DW理事、IFI会長、デンマーク)、アレキサンダー・マヌー(DW理事、ICSID元理事、カナダ)、デ・ロウブシャー(DW理事、IFI次期会長、南アフリカ)、石山修武(建築家、早稲田大学教授、日本デザイン機構理事)。

コーディネーター：大宅映子(ジャーナリスト、日本デザイン機構理事)。

7月6日(火)【午後】

- ・テーマセッションB：**21世紀デザインの展望**(仮題) 討議項目/ユニバーサルデザイン/大交流時代のデザイン/観光のためのデザイン/インタラクティブのデザイン等。

パネリスト：デビッド・グロスマン(DW理事、ICOGRADA次期会長、イスラエル)、フリッツ・フレンクラー(DW理事、ICSID理事、ドイツ)、ガイ・ショッカート(DW理事、ICOGRADA会長、ベルギー)。

コーディネーター：水野 誠一(東京クリ

エイティブ理事長、日本デザイン機構理事)。

- ・総括セッション：**グローバルデザインの行動計画**(仮題) 討議項目/セッションA、Bの行動計画、等。

パネリスト：ロバート・ブレイク(DW副理事長、ICSID名誉顧問、アメリカ)、オーガスト・モレロ(DW副理事長、ICSID会長、イタリア)、アントニー・ブッシュ(BDC会長、DW理事、スペイン)、田村明(地域政策プランナー、日本デザイン機構監事)。

コーディネーター：伊坂正人(日本デザイン機構専務理事・事務局長)

- ・閉会式/DW宣言

略語：ICSID：International Council of Societies of Industrial Design 国際インダストリアルデザイン団体協議会、ICOGRADA：International Council of Graphic Design Associations 国際グラフィックデザイン協議会、IFI：International Federation of Interior Architects/Designers 国際インテリアデザイナー連盟、BDC：Barcelona Design Center バルセロナデザインセンター



3月8日国際文化会館で開かれた準備会風景

Eiko Oya (journalist)

- Session B: Design Perspectives for the 21st Century (Universal design, Age of Exchange, Tourism, Information Environment) Discussants: David Grossman (Israel), Antoni Puig (Spain), Fritz Frenkler (Germany), Gyi Schochaert (Belgium) Coordinator: Seiichi Mizuno (Director General of Tokyo Creative, Japan)
- Plenary Session: Action Plan for Global Design Discussants: Robert Blaich (USA), Augusto Morello (Italy), Akira Tamura (Regional policy planner, Japan) Coordinator: Masato Isaka (JD)
- Closing Ceremony/DW Declaration

* Program

July 5, Monday

- Opening Speech by Kenji Ekuon, Chairman of DW

- Presentation by Mai Felip, Secretary General of DW

- Keynote Speech by Andre Ricard, Director General of DW

July 6, Tuesday

- Session A: Challenging Global Issues (Eco-design for a circulatory society, education for developing countries, disaster rescue, Refugee and Displaced People) Discussants:

Marianne Frandsen (Denmark), Alexander Manu (Canada), Des Laubcher (S. Africa), Osamu Ishiyama (architect, Japan) Coordinator:

環境問題のゆくえ：フライブルク環境セミナーに参加して



廃棄物問題を中心に、制度、産業、生活の様々な場面で環境問題への取り組みが加速してきている。99年2月、ドイツ、フライブルク市における環境セミナーへの参加の機会を得たので、その結果を参照事例として、環境問題の行方について考えるところを述べてみたい。

ドイツの環境首都として知られるフライブルク市は、ドイツ南西部のドイツ、スイス、フランスの3国が境界を接する地域に位置する。3国にわたるこの地域は「レギオ」と呼ばれ、経済、学術等の面で国境を越えた緊密な関係を保っている。フライブルク市は人口20万人、うち大学関係者が4万人という大学都市である。就業構造の面でも、サービス業従事者が85%とソフト産業を基盤としている。こうした人口構成に加え、シュバルツバルト（黒い森）とボージュ山脈に挟まれた盆地という地形条件により、高い環境保全意識が醸成されているようである。

ドイツでは、廃棄物収集にデュアルシステム（資源ごみはDSD社が回収、資源化不能ごみは自治体が回収）が採用されている。フライブルク市では、資源ごみとしては、ガラス類（無色、茶、緑の3

種に分別してコンテナにより回収）、紙類（緑色のバケツで回収）、容器包装類（黄色の透明袋により回収）が回収対象となる。一方、資源ごみにならないものは、黒いバケツにより回収されて埋立処分場に送られる。フライブルクでは焼却処理を行っていない。ここで特徴的なのは、埋立後の有機性廃棄物から発生するメタンガスを回収して、4km先の団地に供給し、ガスエンジンによるコジェネレーションの燃料として活用していることである。これにより団地全体に必要なエネルギーの30%が賄われている。

こうした廃棄物処理システムは、様々な仕組みに支えられている。四つの点を指摘したい。まずは料金面でのインセンティブ。生ごみ（埋立対象）を自宅でコンポスト化する家庭に対するゴミ処理料金の割引制度などがあげられる。二番目に排出者責任の厳しさ。埋立処分場にごみを持ち込む場合、現地で中身を厳しくチェックされ、リサイクル可能と判断されれば受け入れてもらえない。三番目として市民との対話による柔軟な制度運用。飲料用ボトルに対し、消費者負担の強弱の目安としてのデポジット回収率をあらかじめ設定し、この率を下回った場合は制度の運用が困難として制度改正を行うようになっている。最後に環境教育の徹底。環境NPOのBUND（ドイツ環境自然保護連盟）の運営によるエコ・ステーションでは、エネルギー、リサイクル問題などについて市や商店などとの連携により環境教育プログラムを実施している。

フライブルクからの帰国直後に行われ

たヘッセン州の選挙において、SPD（社会民主党）と緑の党の与党連合は野党CDU（キリスト教民主同盟）に敗北した。若年層からの緑の党への支持喪失が目立った。選挙の争点は移民への二重国籍の承認問題であったが、与党連合が積極的に推進してきた環境保護政策（とりわけ税負担の増大）に対する反発が底流にある。環境問題への取り組みのお手本として礼賛されてきたドイツにおいても、経済と環境の相克は深刻である。

経済システムと環境保全の両立。この課題への処方箋が循環型社会の形成である。従来の産業社会システムが、産出と廃棄の引き受け手としての自然環境をシステム外に位置づけていたのに対して、循環型社会では、自然環境をもシステムの内部に取り込んだ社会システムを設計しようとする。政府によるリサイクル関連法案の制定に歩調を合わせるように、企業サイドではグリーン調達、環境会計の導入など、環境対策を経営システムに取り込む動きがみられるようになった。カギを握るのは消費者の行動、つまり、我々の社会システムの選択のあり方である。個別問題への解決の努力に加えて、問題と共存可能な社会システムを設計しなければならない。求められるのは、この方向に向かっての論点整理と選択肢の提示である。 清水尚哉（株）GKデザイン機構



Seminar on the Environment in Freiberg,

In Freiberg in the southwestern part of Germany, wastes are collected separately: GLASS (no color, brown and green are put into three different containers), PAPER (green bucket), and PLASTIC Packages (yellowish transparent plastic bag). Unrecyclable wastes are collected in black buckets and sent to a landfill. The city has no incinerator. Methane gas generated from organic wastes in the landfill is collected and supplied to a housing complex 4 km away as fuel for the co-generation system using a gas engine. Thus, 30 percent of the energy required by the complex is supplied. The waste disposal system in the city is sup-

ported by four points. 1) An incentive to the citizens. The waste collecting fee is reduced if a family composts garbage at home. 2) Strict polluters' responsibility. The contents of the waste are strictly checked at the gate of the landfill, and recyclable wastes are not accepted. 3) Flexible management of the system through dialogue between the municipality and citizens. The system is evaluated to determine whether it is too hard for citizens to observe and is reformed if necessary. 4) Thorough environmental education. In addition to education at school, Eco-Stations run by the federation of NPOs in environment and nature conservation offer environmental educational programs on

energy and recycle issues in cooperation with the municipality and shops.

The dilemma of recycling is found in compatibility between the economic system and environmental conservation. A solution will be a circulatory society, in which nature is incorporated in the manufacturing and disposal system. People's positive choice of such a society is of key importance. Besides solving individual issues, the entire system for such a society must be designed, and now problem areas need to be identified. (Hisaya Shimizu)

循環型社会のデザイン—持続可能な生活とデザイン／彩の国デザイン研修会

18 Mar. 1999 於：埼玉県民健康センター大ホール 主催：埼玉県

循環型社会のデザインに関しJDは分野をこえた議論を重ねています。今回、埼玉県の文化振興事業の一環としての彩の国デザイン研修会「循環型社会のデザイナー—持続可能な生活とデザイン」にJDとして協力し、JD会員によるトークセッションを行いました。参加者は地元のデザイン関係者、企業人、行政関係、市民と多岐にわたりました。以下にその要約を収録しました。



伊坂 (司会)：今日のテーマ「循環型社会」とか「エコデザイン」ということは、もう話のレベルでなく、各専門や市民生活の中での具体的な実践の段階に入っています。しかし個々の具体的なところに入ると全体が見えなくなってしまう。全体を見渡すためには異なる専門や見方を横断した議論も必要ということで、3人の意見をお聞きしながら循環型社会のあり方を検討したいと思います。

電子ネットワークがつくる関係性

竹村：21世紀へのテーマは、ごみそのものを切り離して考えるのではなく、根本的にごみが出ない仕組みはどのように考えていくか、物が循環していく仕組み全



竹村真一氏

体をどのようにデザインするかということです。ごみを出さないゼロ・エミッション化にとって大事なことは一つの工場の中だけで考えることだけではなく、地域全体でどう循環させるかということです。自然界というのは絶対的な廃棄物もなければ絶対的な資源というものもないわけで、それは文脈によって同じものが廃棄物にも資源にもなり得る、そういう文脈をどうつくるか、そこにネットワークというものが非常に重要な意味を持って

くる。そこでは物を設計したり組み立てたりする生産者の段階で廃棄することを考えてデザインする。例えば最初から全部部品ごとに小さなバーコードをつけておく。設計の段階で分別可能な形にしておけば廃棄段階で全部分別することが可能となる。富士通はパソコンのリサイクル率を高めるため代替策に転換していますが、今までの壊れにくいデザインから適度に壊れやすいデザインを経て、今重要になっているのは最初から壊れやすさを考えたデザインです。

今まで生産者と廃棄業者、川上と川下

wastes separately but we must consider the system that does not produce wastes. In the natural environment, the same thing can either be a resource or a waste. Throughout the designing process, we should consider how to dispose of a product after use. An industrial product should be designed so that its components can be separated into parts to be recycled or reused later.

Networking has a great meaning here. Manufacturers and disposers have never been linked so far. If they are connected in networks, and exchange their expertise and information, there are sure to be some solutions. Networking consumers may lead to turning the

れば非常に合理的に分解することができます。これはもう実はメルセデスやBMWなどが実践してきています。

次に消費者それぞれもいろんな形でネットワークすることによってエコ社会というものを実現されていくのではないか。電子ネットワークとして注目されているインターネットというものが私たちの環境問題に大きくかかわってくる。

今の人類というのは、宇宙飛行士のように地球外に出て外から地球は危うい生命体だと心配し始めている。しかし全体像として地球を認識するもう一つのやり方がある。「群盲象をなでる」とよく言います。インターネットそのものが実は自立、分散系のネットワークと言われるように、一人一人はローカルで小さな断片の情報しか提供できないが、ネットワークし合うことによって新しい大きな全体像ができる。

例えば、エネルギーの問題。電力料金はピークになっているときには値段を高く4倍ぐらいにする、みんなが使ってないときには半分にする。そうしておいてエネルギー消費情報を即時にフィードバックさせれば、自分で損をしたくないから省エネをする。盲目的に電力を消費するというのは、まさに私たちがいる意味では群盲だったのです。それがネットワークしていくことによって互いの存在を感じながら全体が有機的につながり、省エネでも何でももっとエレガントな仕組みをつくっていくことができるかもしれない。そういうところにインターネットの可能性とか、新しい情報技術と環境間

present society into an ecological society. Here, the Internet is significant in improving our life. Even though individuals can offer fragmentary information of their local communities, when they are connected in an organic manner through the Internet, they may think of new energy saving systems. I find great potentials in the use of the Internet, and the linkage between information technology and environmental issues.

* Charming packages that carry new values

KANEKO: Product packages are destined to become waste after use. The Japan Package Design Association conducted a survey on ecological packages. We looked into method-

* Electronic Network Relations

TAKEMURA: An important theme for the new century is to design the system in which everything can be circulated. We cannot consider

Symposium [Design for a Circulatory Type Society]

題がつながっていく可能性を見ています。

僕は例えば各小学校の水道の蛇口に小さな液晶パネルをつければいいという提案をしているんです。蛇口をひねった途端にぱっと自動的にその蛇口から出ている水の水源地のリアルタイムの映像が音とともに流れ込んでくる。そういう形でインターネットを応用することもできる。

キーワードはつながること、そういう関係性をどうデザインするかというところでインターネットみたいな電子技術も非常に大きな力になり得るかもしれない。

新しい価値を運んでいくファインウエア

金子: 商品パッケージの多くは使用后すぐごみになる宿命を背負っています。日本では家庭ごみの体積にして約6割、重量に換算して約4割が包装ごみです。日本パッケージデザイン協会でエコパッケージの具体的な方法論やその効果、設計者、デザイナー、また消費者がどう考え、反応しているかということ調査しました。現時点でいかに環境負荷を少なくパッケージを設計デザインしていくかといった取り組み方を方法別に分類し、それを7つにまとめました。

ともかく少なく『減量化』というのが方法の第一になります。この方法として要素を減らす「パーツ削減」、量を減らす「素材量削減」、「中身自体からコンパクトにしてしまうことによる削減」、この3つが考えられます。中身コンパクト化の例ですが、洗剤の場合問題なのは、中

身を在来の感覚で使うと、性能が高くなっている分環境負荷をふやしてしまう。いかに適正量を使わせるかということが課題になり、例えばキャップに適正量の計量機能をもたせるとか、箱の場合も中に入れていたスプーンも紙製に転換してきたりしています。



金子修也氏

迷わず安心『排出容易化』。捨てるということは、この循環型社会においては第二の門出なんです。適正に排出することは非常に大事です。そこには5つの方法があります。まず安心して燃やせる「焼却容易化」。無毒・無害に「安全素材化」、部品散乱の汚染を防ぐ「散乱防止化」、小さく捨てる「減容化」です。

3番目が生かして使う『再生材利用』。再生紙があっても割高で使わないとなるとますますその産業は育たない。そういうものを積極的に取り入れてその産業を支えていくことも必要になってくる。

4番目が捨てずに使う『リフィール化』。これには中身を再補給する「詰め替え」とパーツにして付け替え交換する「付け替え」があります。

何度も使う『リターナブル化』。実は回収にもエネルギーがかかるわけです。したがってトータルで得か損かというこ

と、環境にとって得か損かということを考えなければならない。

マテリアルを『リサイクル化』。素材を統一していく、もし異なる素材を用いた場合には分解分離を簡単にできるように壊しやすいデザインにする。使う素材が再生可能なものでなければならない。最後にその他の取り組みとして、『省エネ対応』や『自然保護素材利用』があります。

企業は生産・技術に、行政は制度に、消費者はそれを正しく積極的に使い対応しなければならない。それぞれ責任がある。それに対してデザインで何ができるのか。まずエコ包装技術の成果を活用すること。制度化やそれを支援するようなデザインにしていくこと。消費者に対してはそのエコパッケージ＝品質簡素化＝貧相化というところにおとしめないで、新しい価値をつくり出し提案・提供していくという役目がある。エコロジーを配慮したパッケージのデザインは、そのパッケージを魅力化する祝詞である、新しい価値を運んでいくファインウエアでなければならないというふうに思えるわけです。

生活を楽しむインフラとしての音環境

鳥越: 音環境という立場からデザインですとか地域の文化について研究をしています。

デザインという概念が物づくりだけではなく、地域の資源を私たちがいかに発掘しそれを築いて共有して守っていくという運動に広がってきています。

ology and effectiveness of eco-packages, and the reactions by designers and consumers. We considered means to reduce the load of wastes to the environment under seven headings. First, to reduce the quantity. This can be approached from the parts and materials of package as well as the contents themselves. Second, to dispose of packages properly. Packages should become easier to burn and be made from safe materials. Scattering of their parts should be prevented, and they should be made smaller when being thrown away. Third, to re-process the materials. Reprocessed paper is available, but because the price is more expensive than normal paper, we need to

encourage people to use reprocessed paper positively. Otherwise, the paper recycling industry will not flourish.

Fourth, to refill. Packages of products for refilling and packages of parts for replacement can be made.

Fifth, to use returnable packages. It requires much energy and money to collect bottles and other returnable packages. However, we must place priority on what is good for the environment.

Sixth, to unify the package materials into recyclable materials. If other materials are used for packages, they should be made to be solvent or easily separated.

Seventh, to use materials that can protect the environment.

Manufacturers are responsible in manufacturing processes and its technologies, the government is responsible to formulate and manage the systems, and consumers must use packages properly. What can designers do? We need to make the most of advanced ecological package technologies. We need to design packages so as to support the systems, and offer charmingly designed eco-packages that would carry new values to consumers.

It is in this decade that the need for eco-packages was seriously found. At the present, the

循環型社会のデザイン—持続可能な生活とデザイン



鳥越けい子氏

平成4年から3年間にわたり山形サウンドスケープ創造事業というCDをつくりました。天童の奈良沢でカジカガエルの声がすばらしいという応募があって取材に行きました。ところがCDをつくるときになってもうそれがなくなっていたことに気がついた。それだけ環境が変わっていたということに音で気づいたわけです。見た目の情報よりも聴覚情報の方がわかりやすいというところがあります。音環境にはそうした意味があります。音から環境をもう一度改善していくような運動にもつながり得るものだと思うのです。環境に対する感性とか美学も含めたインフラをつくっていくこともデザインの仕事の一部だと私は思っています。

最近では環境庁もこういうのは大事だと、「残したい日本の音風景百選」という形で国レベルでも一つまとまった事業となりました。

それから実際絶滅に瀕している鳥などの問題も出てきています。日本が残したいといっても世界で協力していかなければ駄目な音とか生き物だからこそいろいろな可能性、国際協力をしなければいけないことがたくさんあります。

ideas I mentioned above are being conveyed to all sections of manufacturers. The desires of consumers, manufacturers and the government are increasingly overlapped.

* Soundscape as infrastructure for people to enjoy their life

TORIGOE: I am studying design and culture from a soundscape point of view. The concept of design is now expanded from making products to a movement to identify natural and cultural resources within a local community and preserve them. Sometimes, audio information is better understood than visual information. So, soundscape is significant. It may lead to a movement to improve the environment.

大事なのは自然の音ばかりでないということ。柴又・帝釈天の参道のざわめきとか、人間のたてる音も含めて、人間も生物の一つだなどというも実感します。サウンドスケープは1960年代にカナダで提唱された考え方ですが、エコロジー運動としての火付け役になったのは50年代、アメリカのレーチェル・カーソンの「沈黙の春」という本です。毎春聞いていた鳥の音がしなかった、何かおかしいとこの本を書いたんです。ふだん鳥の声を心待ちにしているような生活態度というのがあったからこそ問題が発覚しエコロジー運動につながっていった。そのとき音というのがきっかけになったというのが象徴的だと思うんです。全体というものが今見えなくなって、もう一度どういうふうにするのかが、さらに生活の中で自然を常に感じている状況をどうつくっていくかだと思います。

音の風景という考え方は日本にも昔からありました。今のデザイン、あるいは社会だと音を聴いて楽しませようという施設やコンサートホールが要るだろうという発想になってしまうけれど、何もないからこそ、そこで美的な生活を楽しむインフラストラクチャーとしての虫聴きの会みたいな習慣があった。鳥とか虫を生活レベルで楽しんでいたというのが江戸時代までは日本の生活にあるのですが、近代になるとメジロを飼うというのは自然保護の思想に反するといった文化が地下に潜ってしまうところがある。そういった生活レベルでの環

I think it is part of design work to develop people's senses for sounds.

The concept of soundscape was advocated in Canada in the 1960s. Prior to this, "Silent Spring" was published in the United States in the 1950s by Rachel Carson, and this book triggered an ecological movement. The author noticed that birds' singing that he had heard every year ceased suddenly, and thought something was amiss.

There are many species of birds that are about to disappear. Although we may try to preserve them, some are migratory birds, and would require us to cooperate with other countries. We need cooperation across national borders

境論と美的な文化とのインフラをどういうふうにもう一度取り戻し、新たなネットワークがつけられるのかも大事なポイントではないかと思えます。

伊坂：「沈黙の春」が出されたときにガガーリンが地球を飛び出て、目で地球の美しさを実感しています。公害問題に対して「青い地球像」という具体的なシンボルが対応していた。環境問題を考えるキーワードとして全体性を把握する「身体性」ということが考えられます。



伊坂正人氏

エコの可視化とエココミュニケーション

竹村：音のデザインよりも耳のデザイン、あるいは映像のデザインよりも目のデザインという感性のデザインが人間と環境の関係性を変えていくのではないかな。そういう感性の部分と同時に現実的なことも考えていかなければいけない。

その一つとしてドイツのエコバンクみたいな制度がヒントになる。お金の流れを可視化しながら社会と環境のかかわりを密接にしていく方法がある。

業者、企業の側も非常にエコのことを考えている。しかし、エコを実践すると余分にコストがかかってそれが自分に返ってこない社会の仕組みであると結局正

in order to keep sounds of birds' singing.

It is not only the sounds of nature that is important. People also are part of soundscapes, such as the murmur of voices in a marketplace. In Japan, the concept of "sound landscape" has long been cherished. In the Edo era, meetings to listen to insects singing or birds singing were held. We need to revive these customs in our contemporary life. Through such customs, people can be more keen about the environmental issues. We can develop networking of people interested in soundscapes.

ISAKA: "Physicality" can be a keyword to consider environmental issues.

Symposium [Design for a Circulatory Type Society]

直者がばかを見てしまう。そこをやるのが行政であり、市民と一体になってやるのが重要な課題になってくるだろう。

伊坂：循環型社会を考えていく上で、エコ経済の問題は欠かせないテーマです。それと社会全体で共有する市民感覚がもう一方で重要になってきます。公共の領域でプライベート・ファイナンシャル・イニシアティブというものがありますが、今言われたように、身近なところからの実践がポイントでしょう。

金子：自分たちが参加したことがどうなっているのかということを知りたいというのは極めて自然なことだろうと思うんです。エココミュニケーションというのが企業と行政と市民の間にサーキュレーションしなければいけないのではないかと。物量を善としたものは何と醜いものかというセンスが世の中にできていくと、エコロジーも随分違ってくるのではないかと。お金を換算できない価値や何かを通じて実は奥底で自分たちに結びついてくる、そんなことをつかまえる感性というのが大変重要だと思います。

鳥越：物以上の思い入れとかイメージとか記憶とかネットワークとかがあって、従来の価値観とは違ったこだわりを持っていることでみんなが忘れかけてしまった伝統的ないろいろなネットワークの再構築に結びつき、皆自身がデザイナーになれる。まさにそれがデザインをしていく人なのだと思う。

横切りの議論で全体を見よう

佐藤（会場）：サウンドスケープへの市民とのかかわり方は具体的にどうあるべ



きでしょうか。

鳥越：音に対する感じ方というのはみんな違うけれども、それを意識化すること、情報化し話し合いながら音環境を配慮した形でまちづくりなり、環境政策をしていきたいと思います。

三浦（会場）：正直者がばかをみないようなシステムですが、日本の行政はそういうことに対して腰が引けている。その仕組みを具体的に進めるにはどうすればいいでしょうか。

竹村：可能性として市民が身近なレベルで、例えば自分たちでお金をプールしてどこに投資するかを決めるような構造をつくりながらだんだん底上げをしていて、国などの行政が遅れてついてくるという形が日本の場合にはあり得るのではないのでしょうか。

石原（会場）：パッケージデザイナーが80年代、90年代、主にどういうことをしていたか、企業、行政はどうでしたか。

金子：まだ観念的な動きでしたが、エコパッケージは90年代に入ってからだと思います。今日紹介したようなまとめが、

企業の中のデザイン部門などを通りこえていろいろな部署に今普及しています。それからデザインのスタッフが社内のエコ委員会に最初から入れるようになりました。

消費者、生産者、行政三者の意向が非常にクロスしつつある。特定の行政への働きかけということではありませんが、いろいろなどころへ認識と意識の共有化を図ろうとしています。

環境問題で絶対にこの方法がいい悪いということはいえない。ケース・バイ・ケースでよく考えないと問題を置きかえただけになってしまうでしょう。

伊坂：情報公開ということが問題になっていますが、各専門や市民レベルにおいてもそれが重要です。とりわけ今日のテーマ「循環型社会」の実現に向けては、このような場が意味を持つと思います。

金子修也 日本パッケージデザイン協会理事長、(株)GKグラフィックス社長、JD会員
竹村真一 東北芸術工科大学助教授、文化人類学者、JD会員
鳥越けい子 聖心女子大学助教授、音環境デザイナー、JD会員
伊坂正人(司会) 日本デザイン機構

* Visualizing Ecology

TAKEMURA: Designs to please the ear, or designs to please the eye may change the relations between humans and the environment. We need to nurture people's senses on one hand, and we need to systematize ecological practices on the other. Now manufacturers are very concerned about the environment, and looking for ways to be more ecologically friendly. However, such measures are costly. At this moment, if an honest and sincere manufacturer pays for the cost, it will not get due returns. There should be a people's consensus to share the costs and changes in the social system to make the flow of money visible to the

public.

KANEKO: If people think that to have a large quantity of things is not good, then the situation may change. We need to realize a value in something that cannot be calculated in money. We must develop such a sense.

TORIGOE: If we realize that we have affection for something beyond objects, such as special images and memories that we cherish in our minds, we may develop new values different from the conventional values of seeking materially affluence. Then, we may revive traditional customs that would enrich our daily life spiritually. We may develop networking of like-minded people. Every person can become a

designer of one's life. The first thing is to be conscious about sounds, and share information with others. It will become possible to incorporate soundscapes in urban planning and formulating environmental policies.

Shuya Kaneko / Chairman, Japan Package Design Association, President of GK Graphics

Shinichi Takemura / Ass. Prof. Tohoku University of Art and Design, cultural anthropologist

Keiko Torigoe / Ass. Prof., the University of the Sacred Heart, soundscape designer

Masato Isaka / Japan Institute of Design

動き出したエコデザイン EcoDesign Seminar '99

5 Feb. 1999 主催：EcoDesignSeminar '99開催委員会 後援：日本デザイン機構 他
於：東京・五反田 東京デザインセンター ガレリアホール

若い人が目立った会場

この会に先立って2月1日～3日、早稲田大学を会場に行われたEcoDesign Seminar '99は、エコデザイン及びインバース・マニファクチャリングに関する世界初の国際シンポジウムで、世界中480名が参加し環境調和型製品設計に関する200以上の事例が発表された。その会議のインダストリアルデザイン分科会の発表者に加えて、キーノート・スピーカーとして来日したエジオ・マンジーニ氏（ミラノ工科大学教授）、同会議の組織委員長を務めた山本良一氏（東京大学生産技術研究所教授）を迎えて開かれたものである。司会は益田文和氏（オープンハウス エコデザイン研究所代表）が務めた。会場は参加者で埋まりタイトルの「動き出したエコデザイン」を実感させたが、特に若い人が目立ったのが印象的だった。



エジオ・マンジーニ氏

より少なく消費し、よりよく生きる社会

記念講演のエジオ・マンジーニ氏は「我々がめざす社会は サステイナビリティ社会であり、その実現のためには、まず、いかなる変化にも対応しうる覚悟が大事である。計算したところ資源の消費量を現在の90%節減しなければならない。10%で生活するにはリ・デザインでは不可能でシステマティックな変革が必要である。」我々は「より少なく消費することを学ぶべき」であり、「よりよく生きること—社会的・文化的な生き方」をすることを可能ならしめるためには、単に「与えて済ます」ことではない方法をデザイナーは考えねばならないと述べた。

次いで基調講演の山本良一氏は、エコデザインを巡る今日の具体的な数値を紹介しながら「環境問題について消費者はメーカーが作った商品の中から選択するしか方法はなく力が発揮できない。それ故、

作る業者に重い責任がある。私たち関係者が今、エコデザインの認識を深めることによって船の方向を変えることが出来る」。エコデザインは単に環境効率だけでなく「資源を消費すれば課税する」位の、税制改革を含めた

need to reduce our resource consumption by 90 percent. We must make up our mind to cope with all kinds of changes, notably, to live by consuming resources less. To live a better life, we should look to more social and cultural life." Showing various data, Yamamoto said, "Even though consumers are conscious about environmental issues, they cannot but select products that are produced by manufacturers. So, manufacturers have heavy responsibilities. By diffusing the ecological concept, we can change the course of the industry. Eco-design should be studied not only from environmental efficiency but from all aspects of life. Consumers will select products made with high

生活経済全般から検討べき課題であり、消費者も環境偏差値のより高いものを選ぶ時代になると述べた。また、「エコプロダクトでなければ工業製品ではない」位の認識が必要である。特にインダストリアルデザイナーに材料の知識が欠けているためリサイクルが容易に出来ない問題については共同正犯であると厳しく指摘した。



山本良一氏

企業・行政・消費者それぞれに責任

報告に入り金子修也氏（社日本パッケージデザイン協会理事長）のレポート「エコパッケージデザイン・7つの取り組み方」が紹介された。A ともかく少なく「減量化」。B 迷わず安心「排出容易化」C 生かして使う「再生材利用」。D 捨てずに使う「リフィル化」。E 何度も使う「リターナブル化」。G その他の取り組み「省エネ対応」「自然保護素材利用」など。さらに三者の責任として、企業＝物に責任、行政＝制度に責任、消費者＝利用に責任—をあげた。

佐藤典司氏（立命館大学経済学部環境デザインインスティテュート教授）はエコデザインには3つのポイントがあると、1：デザイン行為自体が、環境負

environmental materials and processes.

Industrial designers often have little knowledge about materials, and they cannot design by recycling resources.

* Responsibilities of manufacturers, government and consumers

Shuya Kaneko reported "Seven Approaches to Eco-Package Design" as the president of Japan Package Design Association. He said that manufacturers have responsibility for their products, the government for systems and consumers for using products.

Prof. Noriji Sato of Environmental Design Institute of the Faculty of Economics of Ritsumeikan University introduced the three

Eco-Design on the Move

EcoDesign Seminar '99 held in Tokyo

EcoDesign Seminar '99 was held on February 2, 1999 at Galeria Hall of the Tokyo Design Center at Gotanda, Tokyo. Prof. Ezio Manzini of Milan Institute of Technology was invited to deliver a memorial speech, and Prof. Ryoichi Yamamoto of Institute of Industrial Science, the University of Tokyo gave a keynote speech. The hall was filled with participants, particularly young people, and gave an impression that Eco-design has got off the ground.

* Better Life with Less Consumption

Ezio Manzini said, "The society that we are seeking is a sustainable society. For this, We

大都会における略式居住 — ホームレスとそのデザイン

26 Feb. 1999 主催：日本デザイン機構
於：東京・六本木 国際文化会館 樺山ルーム

荷を生むもの（例：過剰包装）。2：プロダクト（製品）が魅力的なデザインであること。3：消費者・生活者の価値観の転換—をあげた。そしてID・PD・GD・広告・マスメディアなどコミュニケーションをデザインする人たちの社会的な影響力が大きくなるであろうと指摘した。事例として、トヨタ「プリウス」の「地球にやさしい」に始まるエコキャンペーンのプロセスを紹介した。

益田文和氏は、実際に手がけたプロジェクトを例に「デザインを実際にやっていないと気がつかない所が確実にある」として、ディテールにおけるデザイナーの価値観そのものの重要性を指摘した。「時と共に、ライフサイクルの変化によって価値があがるもの」「イメージが衰退しないもの」など。エコデザインのキーワードとして永遠性につながる「変化」と「仮説性」をあげた。

最後にエコデザイン先進国オランダの研究機関「O2」他の若い研究者3人の報告があり参加者との意見交換が行われた。（報告・佐野邦雄）



major points for eco-design, and pointed out that designers of PR media will have greater influence on the society. Mr. Fumikazu Masuda underlined a designer's sense of value in the details of design while explaining an actual project. He gave "the value rises as time passes" and "the image does not fade easily" as essential elements for eco-design. At the end, three researchers from the Netherlands reported their recent performances. (Kunio Sano)

講師：マリア セシーリア ロスキアーヴォ
ドス サントス(サンパウロ総合大学
建築学部都市計画科助教授)

素材利用の実態把握を研究テーマに

身近に見かけながら一歩踏み込むには勇気のいるこの研究は、今日の大都市共通のアーバン現象であるホームレスの人々の居住における素材利用の実態把握を目的に、1994年からサントス女史によって始められた。サンパウロ、ロスアン



ゼルス、そして東京で発生する大量の廃棄物をシェルターに再利用するホームレスの人々の創造力、独自性、方法などを比較考察している。極限の必要性から生まれる創造力は廃棄物の再生、公共空間の再考につながる可能性を持っている。

サントス女史はまずその動機について「25年ほど前、捨てたモノで道路が溢れている消費社会の光景を見ていた時、一方で捨てられたモノを使って生活している人が驚くほど多くいることに気がついた。捨てられたモノが、社会から忘れられた人が使うパッケージとなっていると

いう現実。それは社会の『もう一面の現象』であり、千年紀（ミレニアム）につながる問題でもある」と述べた。

「バイタルパッケージ」と呼びたい

次に三都市でのホームレスの人々の居住の様子をスライドで説明した。サンパウロ：人口1700万人、コンクリート+ガラスの都市。ロス：ハイウェイ、自動車オリエンテッドの社会。東京：墨田川、上野、新宿。それらハイテクビルの都市には必ず一方でホームレスの人々がいる。

・世界各地で目立つのは「段ボール」。
・こうした方法の生活を大都市で行うということに一体どういう意味があるのかを考えることが、現代の都市生活を考える上で重要。建築として考えた場合「脆い建築」「青いビニールシート」の脆弱な建築と把握することが出来る。
・冷蔵庫の段ボール。工場から使用者への輸送時は製品を守るため。捨てられた後は「人を守るため」に。
・隅田川：日本のホームレスはビニール多用。「バイタルパッケージ」と呼びたい。日本では「包装すること」が非常に大事。
・1994年、新宿区西側。ここから立ち退かされた。
・東京：脱いだ履き物がきちんと揃えてあり文化を感じる。中は非常に清潔。
・ロス：ビルや扉の凸凹を旨く使っている。
・隅田川：アルミニウムを集めてリサイクルセンターへ売る「仕事」
・上野：冬場は管理事務所が大目に見てくれるが夏場は移動。そのためにカート必要。一種のモービルホーム。
・ロスと東京：ビニールシート（プラスチック）が主

JD Salon Informal Shelters in Large Cities Homeless People and their Design

JD Salon was held on February 26, 1999 in the International House in Tokyo inviting Maria Cecilia Loschiavo dos Santos, PhD, assistant professor of School Architecture and Urban Planning, Department of Design, University of Sao Paulo as a guest speaker.

***WHAT Materials are Used by Homeless People**
Maria Santos began her research in 1994 to find what materials are used by homeless people to make their "homes" in Sao Paulo, Los Angeles and Tokyo. She makes a comparative study of creativity, individuality and methodolo-

gy displayed by the homeless in these three large cities in turning massively abandoned waste materials into their shelters. Their creativity generated in the absolute necessity suggests the ways to recycle or reuse waste materials, and to redesign public spaces. She was first motivated about 25 years ago, "When I was disgusted with the streets filled with trash and other waste that people threw away, I also noticed that surprisingly many people were living on these abandoned things. Abandoned people are using abandoned things. It appeared a symbolic phenomenon of the contemporary society, which would continue into the new millennium."

Informal Shelters in Large Cities—Homeless People and their Design



役。・「鳥羽さんの家」：インテリアで自己主張。テレビ、暖房、発電機。・山谷：「白い家」。中が暗くならないので白いビニールシートが気に入っている。・サンパウロ：高速道路の下。子供のいる家族。ブラジルでは家族が多い。日本は男性、個人。ロス：ベニヤ板、段ボールビニールシート。中にピンクのソファ。人形。家庭的雰囲気。男女。モノだけしまおうのではなく記憶を大切にしている。・サンパウロ：金属の器。「私は貧乏だけど持ち物の手入れはきちんとやっている。「私たちでこの場所を作った」という自負心が強い。・日々の食料を得ることは最重要。とても複雑な手段で得ている。火を使うことは即危険。廃品を活用して道具を作ることに長けている。イマジネーションとブラジルのクラフトの伝統がここに生きている。・廃品を違う眺めで見ることが出来る。その時々で使うサバイバルな展開。

人間だという目

参加者との意見交換の中では、市民団体の安江鈴子氏から大阪市で調査したところ8,660人と大方の予想を上回る人がいたことが紹介された。栄久庵憲司氏の「ホームレスを見る目は色々あると思う。日本で彼らに職業を用意しても仲々乗らない。好きだなあと感じることもある。文化的部族・新人種の誕生と見ることもできる。サントスさんはどういう目ですか。」という問いに対し、女史は「彼等はアーバンカルチャーの一つになりつつある。ところが得てして政府の対応はクリーン化の方のみへ行きがちです。建築家もまた彼等を立ち退きに追いやったり住みにくくする立場に立つことが多い。『人間だ』という目が大切です。」と基本的な考えを述べた。

(報告・佐野邦雄)



* VITAL Package

She then explained her observation about the homeless in the three city showing slides. All these cities with high-tech, high-rise buildings have homeless people. The most commonly used materials in the world are corrugated cardboard and vinyl sheets. They serve as vital packages for them. Tokyo (Sumida River, Ueno and Shinjuku): The homeless are mostly men. They collect used aluminum cans and sell them at a recycling center. They put off their shoes and carefully place them at the exit, reflecting Japanese culture. Very clean inside. Los Angeles: In this automobile-oriented city, the homeless comprise both men and women.

They use dents in the walls of buildings and fences. Plywood sheet, cardboard and vinyl sheets are used. Inside are a pink sofa, dolls.. and has a homely air. Sao Paulo: Populated by 17 million, it is a city with concrete and glass. Quite a large portion of homeless people are families living under highways. They even have metal tableware which they take good care of. They are good at creating tools from waste materials. Looking at their use of waste material, she said she could have a fresh viewpoint to look at them. She also considered it important to contemplate the meaning of people living in large cities in these ways. A participant from an NPO introduced that there were

8660 homeless people in Osaka city. Asked what she saw about these people, she replied, "Homeless people are now becoming part of urban culture. But the governments tend to exclusively send them out in order to make the city cleaner, architects also tend to take a position to let them out or make it hard for them to live in the cities. We should see them as humans."
(Kunio Sano)

障害者のためのデザイン／1993年設立のヨーロッパ障害者のためのデザイン研究所 ポール ホーガン JD顧問

私のような身体障害者にとって殆どの物が健常者それも元気で経済的にも余裕のある男性を対象にしていると気づいた。それがこの組織設立の始まりだった。健常者以外の人々は常に困った思いをし、取り残される危険すらある。従来のデザイン教育は、障害者は貧乏で短命という過去の現実を反映していた。デザイナーも彼らはお金はないし、どうせ若死にするのだからと気にしていなかった。しかし今は医学の進歩により、障害者も同様に生涯を全うでき、全体として購買力のある市場を構成している。高齢化の急速な先進国は障害者も増加している。しかしデザインはその趨勢に追いついていない。これが1989年に高齢者と障害者のためのデザインに関する欧州会議開催の理由であった。1973年に京都で会って以来の友人ヴィクター・パパネックが基調講演者で、この会議は大成功だった。

その2年後、障害者も社会の一員とするよいデザインの普及を目的にアイルランドでデザインと障害研究所 (IDD) を設立した。建築家、デザイナー、リハビ

リ専門職、障害者を研究所メンバーに、事務局をダブリンの国立芸術大学に置いた。障害問題を扱うデザイン組織として世界で唯一のものだと後でわかった。関心を寄せる欧州のデザイナーも多く、1993年には欧州機構が設立された。この組織は現在15ヶ国が加盟し、来年4月にはダブリンで「すべての人のための都市と町」会議を開催する。

1995年にバルセロナの国際会議で講演をした。この会議のバルセロナ宣言では欧州の地方自治体に、国連人権宣言と国連の「障害者機会均等に関する統一規則」のもと障害者の人権を認め自由に外出できる都市づくりを要請している。その背景は「障害とは個々のもつ技能とその技能が生かされる周囲の状況との間に相互作用のある動的な概念」との確信である。宣言の第1条は、各国の地方自治体に「障害者の権利、ニーズ、潜在能力、社会貢献についての市民意識の高揚促進」を要請している。カリスマ性のあるバルセロナ市長パスカル・マラガルによるバルセロナ宣言(1995年)は、その後欧州委

員会の後押しで現在までにバルセロナ、カーディフ、フランクフルト、ジュネーブ、リーズ、リスボン、マルセイユ、サラニカ、ストックホルムなど欧州298の市長が調印した。IDDの目標はアイルランド諸都市の宣言調印への関係者の説得である。

NEWS (財) 共用品推進機構の発足

鴨志田厚子当会理事が会長を務めているユニバーサルデザインなどを推進してきたE&Cプロジェクトが財共用品推進機構として再出発することになりました。障害者・高齢者の不便さ調査、共用品・共用サービスに関する標準化研究、モニタリング・評価、出版、データベースづくり、展示会・シンポジウムの開催などを事業の柱として、99年度事業としては、「共用品展」開催や「共用品白書」発行、情報誌「インクル」創刊などの多彩な活動を計画しています。

ユニバーサルデザインは分野を越えたデザインの基調となっています。さらなる推進を期待します。(伊坂正人)

DESIGNING FOR DISABILITY

European Institute for Design and Disability (established in 1993).

It started with my own disability and the realization that most design was for people who were fit. More than that, the target consumer was in general male, affluent and in perfect physical condition. If you didn't conform to this stereotype, then you were in real trouble and in danger of being marginalised.

Design training reflected a historical reality in which people with disabilities were poor and short-lived. The designer didn't have to worry about them because they had no money and died young. Today, thanks to advances in medicine, people with disabilities can live a full life span. Collectively, they represent a market with considerable purchasing power. Design, however, has hardly come to terms with this huge demographic shift which, in industrialized countries, means a rapidly increasing population of aged and disabled people.

This was the reason which led me in 1989 to organize first the European conference on design in the service of the elderly and the handicapped. My friend, Victor Papanek, who I first met in KYOTO in 1973, came and delivered the keynote address. The conference was a great success.

Two years later I established the institute for Design and Disability (IDD) as a purely Irish organization. The object of the IDD was (and

is) to promote the inclusion in society of people with disabilities through the exercise of good design. It has a membership of architects, designer, rehabilitation professionals and people with disabilities and is based at the National College of Art&Design in Dublin.

It was only later that I found out that it was only design organization in the world established to deal with issue of disability. Designers from other European countries expressed an interest and the result was the establishment of the European Institute for design and Disability in 1993. This organization now has members in 15 countries and will hold its annual general meeting in Dublin following the conference on The City and Town for All next April.

It 1995 I went to Barcelona to speak at a conference following which the Barcelona Declaration was launched. This international convention recognizes the rights of people with disabilities under the Universal Declaration of Human Rights and the United Nations' "United Rules on Equal Opportunities for Disabled Persons" and commits Municipal Authorities throughout Europe to make their cities and towns accessible to people with disabilities. It is based on the belief that, "Disability is a dynamic concept, resulting from the interaction between individual skills and the conditions of the surroundings in which such skills are manifested". Article 1 commits the signing Governments to "promote better awareness of

disabled persons, their rights, their needs their potentials and their contributions among the general public".

Launched in 1995 by the charismatic mayor of Barcelona, Pasqual Maragall, with the support of the European Commission, to date the Declaration has been signed by 298 European towns and cities, including Barcelona, Cardiff, Frankfurt, Geneva, Leeds, Lisbon, Marseille, and Stockholm. The objective of the IDD is to persuade Irish cities to sign on to it.

(Paul Horgan / JD Advisor)

Kyoyo-hin Foundation Established

E&C Project that had promoted "universal design" under the chairperson Atsuko Kamoshida, JD director, was re-organized in the provisional name of Kyoyo-hin Foundation, meaning an organization promoting the production of commonly used things by both disabled and ordinary consumers. It plans researches on inconvenience confronted by the disabled and elderly people, study on the standardization of commonly used products and services, monitoring and evaluation methods, database formation, exhibitions and symposiums. For 1999, an exhibition of common-use products and a publication on these products are being planned. (Masato Isaka)

From the Secretariat

事務局から

海外情報

チルドレンズミュージアム

3月初旬にロサンゼルスサイエンスミュージアム、サンフランシスコのディスカバリーミュージアムおよびエクスポトリウム、サンノゼのテックミュージアムなどを見る機会を得ました。

対象を子供に絞っているディスカバリーミュージアムをはじめ各ミュージアムともに手で触れること、体験を通して物事を理解したり、創造性を発揮したりするプログラムをもって運営されています。また知識を学ぶ学校と実物をもって学ぶ博物館とのインタラクティブな連携がなされていること、親と子が共に楽しみながら学ぶことができること、そして年長の子供が年下の子供に教えるという子供と子供の間を結ぶプログラムなど多面的な検討がなされています。日本の博物館にもハンズオン(手で触れる体験型)のものができてきましたが、博物館・学校・地域の連携やそれらを円滑に結びつけるボランティアの風土が機軸になれば形だけのものに終わってしまわないと実感してきました。(伊坂正人)



サンフランシスコのディスカバリーミュージアム

Children's Museum

I visited the Science Museum in Los Angeles, Discovery Museum and Exploratorium in San Francisco, and Tech Museum in San Jose. All of them allow children to touch exhibits, to understand phenomena by simulating experiences, and provide programs through which children can display their creativity. The combination of school education and museum education is also under consideration. This attempt cannot be implemented without the help of volunteers who are linking museums and schools and communities. I came back with a thought that we should design the ground making for such linkage. (Masato Isaka)

中国でユニバーサルデザインの授業

3月に中国の大学で2週間「ユニバーサルデザイン」の集中講義を行った。前半は講義、後半は演習でテーマは1. 老人が自由に使える電話機。2. 握力の落ちた人でも使える箸。3. 片手の不自由な人でも使える爪切り。4. その他自分で見出した対象。

短期間だったが学生は素直に受け止めコンセプトからスケッチ(50案目標)、ラフモデルまで全員が成し遂げた。造形も短期間とは思えない程だったが、ユニークな発想のソフト2案を紹介したい。

A 電話機: 老人を家において家族が外出する時に電話のテープのボタンを押して行く。電話がかかってくると「唯今、家には老人がおります。なるべく大きな声で、ゆっくりお話し下さい」というメッセージが相手に送られる。(女子学生)

B 電話機: 昔からの親しい友人に電話をかける時、相手の顔写真を電話機の上に数枚セットするスペースを設け、その写真を見ながら話をする。(男子学生)

こうした素朴で、しかも生活の中の機微に触れるアイデアは、産業界の発想とは異なるものであり、そうした生活の実態に基づいた発想を取り入れて多くの人々の共有のものに広げていく仕組みづくりが必要だと改めて考えさせられた。

世界の人口の四分の一を占める中国によるユニバーサルデザインの早期導入を願っての試みだが、学校・学生ともに極めて真摯に受け止めてくれ、今後とも研究的に継続していくことになった。

(佐野邦雄)

Teaching Universal Design in China

In an intensive 2-week course on universal design in China, I gave my students assignments to design telephone, chopsticks and a nail cutter. Unique ideas were presented. A telephone by a girl student: When family members go out leaving only the elderly person, they switch on the tape-recorder that says "a grandparent is at home, please talk slowly and loudly." Another telephone by a boy student is: "Provide a space to stand several photos on the phone so I talk with my friends while looking at their photos." A mechanism to incorporate these humane ideas into product design should be devised. (Kunio Sano)

編集後記

つなげる

本号は2大特集となった。当機構と今後深く関わりを持つこととなる国際組織 Design for the Worldのこれからの活動についての特集と、JDの活動テーマの一つ「循環型社会のデザイン」など、エコロジーにまつわるデザインを深め広げるための特集を再び組んだ。

浦和でのシンポジウムの講師の一人、JD会員竹村真一氏の示すゼロエミッションの事例—ビールかす飼料を食べた家畜の糞が肥料となり麦を育て、麦が再びビールとなる—典型的な循環である。この循環を生んだのは産業の異分野を繋げたネットワークの力である。

今号の2つの特集に共通するキーワードはまさに「つなぐ」ことである。知をつなげ、知と美を循環させるJD、DWの役割は重要である。知と美を活性し、新たな価値を生むには、専門を横断し統合する知の力に基づいたボランティアが必要であり、ボランティアにはコストがかかる。また、モラルだけを頼りにこのコスト負担はできない。損得の概念(エコノミー)の導入は必至である。環境配慮企業にISO認証が与えられるような、具体的なパワーが発揮できる国家的、国際的な評価の仕組みやコスト負担の方法づくりのソーシャルデザインが求められる。(迫田幸雄)

VOICE OF DESIGN VOL.5-1

1999年4月25日発行

発行人/栄久庵憲司 編集人/佐野邦雄

編集委員/迫田幸雄(委員長)、鳥越けい子、黒田宏治

翻訳/林 千根

発行所/日本デザイン機構事務局 〒105-0001

東京都港区虎ノ門1-2-18 虎ノ門興業ビル7F

印刷所/株式会社高山

Editor's Note

A common keyword for the two featured articles in this issue is "network." In order to activate people's aesthetics and the wisdom to create new values for a circulatory-type society, we need a strong will and the initiative to integrate wisdom and expertise of different specialties. It costs a lot to put this initiative into action, therefore, the concept of economy must be introduced. We need to develop systems to bear the costs. We also need national and international certification standards such as ISO certificates to be awarded to organizations working for the realization of a circulatory-type society. (Yukio Sakoda)